新ドイツ零年（1991）

ALLEMAGNE 90 NEUF ZERO
GERMANY YEAR 90 NINE ZERO

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ロマンス
製作国 フランス
色彩 Color
時間 62分
初公開日 1993/12/25
公開情報 広瀬プロダクション

【解説】

あまりに引用される事物――映画（題を採ったロッセリーニの「ドイツ零年」やムルナウの「最後の人」、バルネット「青い青い海」など）だけならまだいいが、リルケやゲーテやカフカの作品の一節、ヘーゲルの『哲学論』、デューラーの絵画、芸術家の記念館や銅像まで登場する――が豊富すぎて、もちろん、それにばかりに惑わされるべきではないのだが、すっかり術中にハメられてしまった。“難しい”と思うととことんダメになるのだ、ゴダールなんて代物は。けれど、彼自身“この映画の台本は歴史”と言っている、西洋史に関し、せめて近現代に限ってでも、欧州人に近い感覚が持てれば、その引用の示す精神的背景を、宣伝チラシの解説の字面以上には理解できるだろう。それを備えられれば、この映画はたたやすく向こうから近づいてくれると感じる。少なくともこの作品に関してはいつものゴダール作品のように、ただ感覚的にその映像を楽しむわけにはいくまい。やはり作者の言うように“歴史は単純で追いやすいものなので”この映画の“キャメラの動きは”いたって“緩慢”だ。Ｂ級ノワールの設定を借り、再び「アルファヴィル」の密偵レミー・コーション（Ｅ・コンスタンティーヌ）の登場する作品であっても、彼は西洋のように老いており、ベルリンの壁崩壊後、東独から西側へ舞い戻ろうというその歩みも、壁の４０年の重みにはね返され、ドキュメンタリーとして挿入される、東西ドイツ対立・ナチスのユダヤ人虐殺・ロシア革命・ウーファ撮影所の世界に冠たるドイツの映画などの考察と共に、旧東独内をうろつくのに終始する。そこには“歴史の孤独”が確かに見られ、思わず絶望に囚われてしまいそうにもなるが、そうならないために、この映画から学ぶことはたくさんあるはずだ――とだけは確かに言えよう。

【クレジット】

監督	ジャン＝リュック・ゴダール	Jean-Luc Godard
脚本	ジャン＝リュック・ゴダール	Jean-Luc Godard
撮影	クリストフ・ポロック	Christophe Pollock
	アンドレアス・エルバン	
	ステファン・ベンダ	
出演	エディ・コンスタンティーヌ	Eddie Constantine
	ハンス・ツィッシュラー	Hanns Zischler

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.